

私と土木



飛島建設株式会社
特別顧問 **伊藤 寛治**
(東京土木施工管理技士会 前会長)

はじめに

大学の土木工学科を卒業し建設会社に入社、早や50年近く経ってしまいました。この度5年にわたり務めさせて頂きました東京土木施工管理技士会会長を辞するにあたり、誌上でのご挨拶をということで原稿依頼を受け、同時に掲載する写真探しを致しました。とりわけ思い出深い1974年入社以来約20年間の現場勤務時代の写真を改めて探してみたのですが、現場で写した写真となると極端に少ないのです。と言うよりほとんどありませんでした。フィルム時代でしたから個人の映像部分を切り取っておかなければネガ・ベタ焼きが工事写真として残るわけで、撮ること自体がはばかられたか、職員同士で写す余裕などなかったか、今となっては残念至極です。しかし不思議と自身の周辺で起こった出来事の多くが鮮明な記憶として残っているのは、それだけ緊張し充実した日々だったのではないかと考えています。

この度このような機会を頂きましたので、誠に僭越ではありますが私自身の「土木」と関わった日々を振り返ってみたいと思います。

建設業を志したこと

小学校の卒業文集で建築家になりたいと書いています。身内、親戚筋に建設業関係者はいなかつ

たのでなぜそんな思いを持ったのか動機は覚えていません。その作文では大きな別荘を建てたいというほかにダムや高速道路もつくりたいものとして書いていますから建築と土木の区別は出来ていなかったのでしょうか。単にヒーローい場所でオーキなものをつくるということに憧れていたのだろろうと思います。中学・高校とその思いは持ち続けませんが、とりわけ土木構造物の持つ公共性、社会性に惹かれました。土木工学科受験では必須の数学と物理が大の苦手だったので正直苦労しました。大学に入ってから当然のことで単位を取るのさえも難儀しましたが唯々土木技術者になりたい一心で何とか卒業まで漕ぎつけました。

ゼネコンを選んだ理由

みんなで力を合わせて一つのものをつくり上げるにはやはりゼネコンしかないと思い、土木に強みを持つ会社に入社しました。その時自己紹介の得意科目の記入欄に鉄道工学と書いたことが社の人間の目に留まり、以来鉄道現場一筋で約20年、思い焦がれた土木の現場監督として飯を食うことになりました。

土木現場では

現実の現場勤務は想像していたより遥かに地道で地味な世界でした。人を動かす忍耐力や根気が



学生時代研究室で

求められ、また体力勝負のようなところもありましたから、正直これはえらい世界に踏み込んでしまったなという思いでした。当時の新卒者の離職率は現在と比べれば極めて低い時代だったと思われるのですが、同年配の社員の中には現場を取り巻く環境や社内の人間関係などに上手く適応できずに去っていく人もいました。私の場合、向上心や積極性が薄れ上司に指示されるがままの毎日の繰り返しとなり自分自身を見失ってしまった時期もあつたりしましたが、先輩に諭されたり、同僚に励まされたり、“乗りかかった船なんだから”と自身に言い聞かせたりして敗走することなく勤め続けることが出来ました。そして何年かを経て主任になり課長になり所長になり、一つの現場を終えるたびに自分自身が成長していくことを感じました。それまでの苦勞を忘れさせてくれるばかりではなく、「竣工」はその瞬間から社会の中で当たり前前の日常として存在する構造物の価値を施工者たるものに十分な感動を与えてくれました。

経営者として

その後支店、本社の管理業務などを経験し60歳を過ぎて社長に就きました。入社した時には想像だにできなかった社長職。まさに一介の土木技術者として育ってきた人間にとって会社経営というのは全く異質の世界でした。しかし社長に就いたことで、建設業の協会の仕事や経済団体の活動に参加することが出来、それらの機会を通して次第に日本の建設産業の全体像を捉えることができ、取り組むべき多くの課題も見えました。建設業に入職しようとする人を少なくとも減少させないために、業界として経営者として課題解決に真剣に向き合わないといけないという気持ちを強く持ちました。とても価値ある貴重な経験でした。

土木施工管理技士への期待

施工管理技士は施工管理業務においてQCDSEのすべての対応が可能レベルと判断された資格です。技士はその資格に大いなる自信と誇りをもつ

て現場に立って欲しいと思います。現在の入札制度では工事経歴に重きを置き過ぎているのではないかと私は感じていますが、QCDSE各分野に知見を持つ技士であるからこそ研鑽を怠ることなく精進し、当該現場で求められる問題解決に大いに力を奮って頂きたい。その働く姿と成果を一つ一つの工事で周りの方々に見せることが土木工学と公共事業への信頼を増すことに繋がると私は確信しています。

数年前、世間では3Kと言われ敬遠されていた中で、実際の建設業に従事している若者は誇りにさえ思っているというアンケート結果が出ていました。私も常々3Kは誇りだと言っています。それは「協力」「感動」「貢献」です。それは全ての工事関係者が協力してつくり上げる、つくった人にも利用する側の人にも感動を与えてくれる、それは社会への貢献そのものである。3Kこそ誇り、それは「守ろう」とする気持ちから発せられるものだからです。人々の生命・財産を災害の危険から守る。健康的、文化的生活を守る。経済活動を守る。私が目指したあの時代の土木の志、輝きは現在でも決して色褪せていないはずです。皆さんの働く姿勢と目指す視点を、次に続く若者にも届くよう見せてください。宜しく申し上げます。

最後に

会長在任中は多くの皆様に支えて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。またこの度このような機会を頂き、私自身の土木との関わりを記することが出来たのは大変な幸せです。最後までお読み頂き誠に有難うございました。

東京土木施工管理技士会並びに会員企業の今後益々のご発展と、関係者各位のご活躍とご健勝を祈念申し上げます。



入社2年目鉄道現場で